



妖怪談義



川崎ゆきお

妖怪博士は新しい妖怪、つまり最近出てきたような現代妖怪が得意なのだが、その研究には古い妖怪についても知る必要があると思い、日頃から心がけている。これを心がけのいい人とは言わないかもしれない。何せ妖怪についての心がけなので。

そんなとき、付き合ってくれるのが民俗学者の常田博士だ。この人も暇ができたので、二人でお茶をしている。実際に忙しいのは常田博士で、妖怪博士は年中暇なのだ。だから、先方が暇なときに日時を合わせた。

「古い妖怪ですか」喫茶店に入った瞬間、妖怪博士が切り出す。挨拶もなにもない。そう問われて常田博士もすぐには答えられない。あらかじめ質問事項を言ってくれば楽なのだが。

「古いと言うことですね、妖怪博士」

「はい」

「妖怪化する状況があります。そこをとらえるべきでしょう」

「たとえば」

妖怪博士は鋭く問う。いつも、問われる立場なので、気持ちがいい。

「たとえば……ですか」

やはり、急なので、常田博士も答えれないが、何とか探し出したようだ。

「カガシです」

「案山子ですか、田圃に立ってる」

「カカシじゃなく、あれはカガシなんです」

「ガですか」

「嗅がしです」

「ほう」

「嗅がすわけです。イノシシとか猿とかにね」

「何を」

「まあ、嫌がるものですねえ。イノシシなら、イノシシの肉でもいい。それで田圃に寄せ付けないようにするのは。だから、一本足のあの形にする必要はない。これではですねえ、作物を狙っている獲物によって違うんですよ。平野部の田圃ではイノシシは近付きにくい。だから鳥でしょうかねえ。今でもカラスや雀が来るでしょ。それで、ああいう形の人型にした。人がいると怖いので来ない」

「妖怪はまだですか」

これも、妖怪博士はよく突っ込まれたことだ。

「人型にしても、鳥も見抜きますよね。それよりも、もう嗅がすような、臭いで寄せ付けられない意味でのカガシの意味を失っている。しかし、あれをカガシと呼びます。もう嗅がさないのにね。この次元では妖怪は出ません」

「まだですか、次のステップがあるのですね」

「はい、カガシに今風の服を着せても、また見破られる。だから、そんなに効かないことは分かっているのです。実際には別方法、たとえば光るものや、風で音が出る鳴子のようなものの方が効きます。山田なら鹿脅しでしょ」

「じゃあ、一本足の案山子は意味がない」

「そこです妖怪博士」

「はい、どこです」

「それなのに立っているのは、または立てているのはどうしてでしょう」

「アクセサリーのようなものだ」と

「そうそう。しかし、ただの飾りじゃない。そこに呪術的なものが入りこんだ瞬間です。まじないのようなものです。あれは、田圃を守っている神様が入っているのだと」

「立体お札のようなものですか」

「まあ、そんな感じですが、護符はただの呪文が書かれている紙切れ、板切れとしては見ないでしょ」

「ああ、はい」妖怪博士は曖昧に答える。このステップがやや粗いと思ったのだが、話の流れを邪魔するわけにはいかない。

「それが妖怪の発生ですか」

「まだ、発生していません」

「じゃ、いつ」

「カガシから案山子になってもまだ妖怪は発生しないのです。後で誰かが案山子を使った妖怪を発明するかもしれませんがね。もう嗅がす必要はなく、また、鳥も追い払えない。それなのにまだあるというのは、中に神様がいるからです」

「何の神様です」

「田の神様でしょ。つまり、山から降りてこられた山の神様です」

「はい」

「案山子には神様の片鱗が入っていますが、そうでない場合、物の怪になる。つまり妖怪になる。これが妖怪が生まれる初期の段階で、最初はおそらく神様なん でしょうねえ。要するに、案山子を邪険に扱ったり、収穫後に案山子祭りをしないで放置すると神様が妖怪になる、物に入るので物の怪なんです。祭らなくなっ た物は、祭ろわぬ物となります、即、妖怪です」

その後、常田博士は秋祭りの後、この案山子も祭る儀式があることを懇々と話した。神様は見えないので、案山子はその代理のように見立て、見えるものとして便利なので、使ったとか。

「神様がいつ妖怪と入れ替わるかですねえ、常田博士」

「はい、それは人々の認識の変化で、生活様式や、新しいものなどが入ったとき、または新し神様を受け入れたとき、変わるのでしょうかねえ。人々が変えるのです。時代が変えるのです」

「ありがとうございました。常田博士」

「いえいえ、先人がすでに言われていることをコピペしただけですよ」

「真似損ないも妖怪の発生になりますかな」

「はい、なるでしょう」

妖怪博士は丁寧に礼を述べ、散会した。

